

伊奈波社

伊奈波神社社報

【平成24年 7月号】 No.19



宵宮／岐阜新聞社提供



伊奈波神社宮司

東道人

清韻

六月の緑豊かに広がった山々は新たな自然の生命の息吹と新たにめぐり来た青葉若葉の美しい色彩が心を安らかにしてくれる。まず以って氏子崇敬者の皆さまにも、恙つがなく日々をお暮しのことと存じ上げます。

さて、硯と書いて「へすずり」と訓むのですが、祖父に墨を擦りなさいと言われ遊びに行こうとするとよく墨刷りと言われたものです。「の」字を書くように、ゆったりと静かに刷りなさい。硯は中国の端溪硯、歙洲硯、澄泥硯などが知られている。日本では、対馬産の若田硯、石巻産の雄勝硯などがある。

ひろく、愛でられているのは端溪硯であろう。最近、硯や墨を使うことが減少して、墨書文化も厳しい現状にあるが、私どもは、このほか伝統文化を守らなければならない。硯ひとつに、墨つくり、筆つくり、紙つくりの方向がそれに渾身を込め従事されているのであるから、職業を守ることも大切である。単にパソコンが出来たから、全てパソコンで、便利と言いかも知れないが、それでは文化や伝統そのものが、消失していくだけであり、それを失わさせてはいけないものも存在するのである。神職になつて間もない時、ある老神職が、祝詞のなかに一字だけよい字があればよ

いのですと言われた。それは字は下手であっても、一字だけ素晴らしい字が存在すればよいという。

祖父は、私が墨を刷り終ると半紙と筆を持って来て、文鎮を平行に真つすぐに置いて、正座をさせ、筆を真つすぐに立てて持ち、左手は半紙の横に置き、静かに力強くゆつくりと筆を進めるが、ほかのことを考へていると、ピシャーと手が飛んで来る。マァ遊びどころではなくったと思いつつ、友だちの顔を思い浮べて早く終わらんかなあと思つて、祖父から字を習つたが、そもそもそのような態度では上達する筈もなく、いつしか祖父も加齢を重ねていたのである。

硯はながめながら刷り、紙は幅を見たり、その紙の上に何を置き、どう描くか、あるいは書く字を想像する楽しみが硯と墨と紙と筆にはある。時間に追われながら、人と人との触れ合いの忙しさのなかで、心を穏やかに静かにするひとときがあつてよい。字でも絵でも残るものである。その残るものに自身の魂を筆によって表わしてみるのもひとつでなかろうかと思われてならない。墨は五〇年以上経たものがよいということ聞いたが、それは膠が抜けおちて、ほどよい墨となると云うのであるが、まだその境地の墨の味というものを知らない。祖父が、心を穏やかにゆつたりとした気持ちで墨を刷るといふことだけは、今も覚えている。それは祖父からの財産かも知れない。



写真提供/吉田尚弘氏

例大祭

年中祭典の中でも一番の重要祭儀とされる例大祭は、岐阜の町に春のお訪れを告げる「ぎふまつり」と称され、古くは旧暦三月三日を以って祭日と定められておりましたが、明治六年新暦施行に伴い現在の四月五日に改められました。

今年は長引く寒さの影響で開花が危ぶまれた桜花が艶やかに爛漫となり、献幣使として高山市・櫻山八幡宮 宮司 谷田吉和様(岐阜県神社庁副庁長)に御参向を賜り、責任役員・総代・神社委員・氏子崇敬者等二〇〇名余りの関係者が集う中、午前十時、宮司以下祭員が参進し祭典が開始された。

御神前に神社本庁幣・氏子幣を奉献し、宮司が御祭神の御縁日を言祝ぎ、皇室の弥栄・国家安泰と氏子の平穩無事・地域発展を祈り祝詞を御奏上申し上げ、参列された責任役員・総代を始め、国会議員・市議会議員・神社界・仏教界・各種団体代表者が玉串を奉りて拝礼を行い、祭典は盛大かつ厳粛に斎行されました。

例大祭の斎行に際しましては、玉串料や献備品のご奉納、ご祝辞・ご祝電を全国の皆様より多数賜りました事、ご厚志誠に有難く、ここに厚く御礼申し上げます。



直会 (写真提供/吉田尚弘氏)



氏子幣奉献 (写真提供/吉田尚弘氏)

手古舞に御協賛頂いた皆様

- 四木会 会長 西川長正
- ㈱大石
- ㈱西武管商 代表取締役 浦瀬武夫
- 戸島工業㈱ 代表取締役 荒川晶一
- ㈱ドライビングサービス 浅野茂樹
- ㈱三和サービス 林正和
- 林義則
- 浅野辰夫
- ㈲浅野工務店 取締役 浅野進一郎
- 広瀬織布㈱

(順不同・敬称略)



昨年は東日本大震災の被災状況に配慮して中止となった「ぎふまつり」の神賑行事が、二年ぶりとなる四月七日(第一土曜日)昼夜共に好天に恵まれ斎行された。

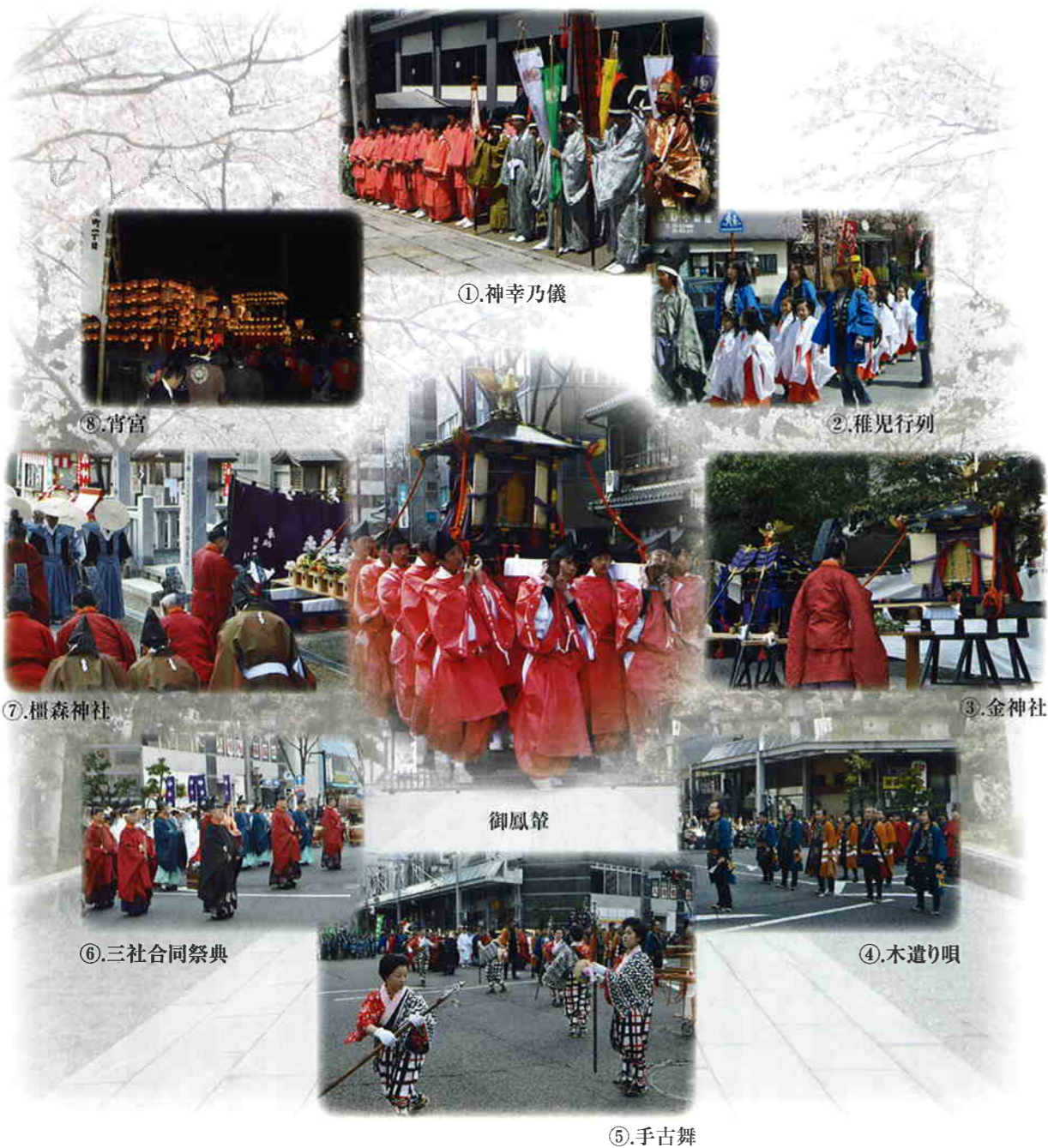
神幸祭

正午、御風輦を中心にして威儀物や装束を纏った一〇〇名を超える供奉員が隊列を整え神社を御発幸。主祭神五十瓊敷入彦命の御妃神が鎮座する金神社、御子神が鎮座する榎森神社に渡御をして御旅所祭を斎行した。途中、市内で一番の繁華を見せる柳ヶ瀬を南北に貫く神田町通りを御神幸、夫婦親子の三社の神幸行列が合流し、一体となつて渡御する有様は、春日差しに照らされ、絢爛豪華に醸されて、集いし数多の人々も感嘆の声をあげていた。

宵宮

渡御の賑わいが落ちて夜帳が下りる頃、太鼓の音が境内に轟き宵宮の始まりを告げた。

所狭しと群れ集う見物人を掻き分けて、踊山車・若戎車・安宅車・清影車の山車が曳き揃い、九基の御神輿が先導する手古舞に続いて練り込まれ、境内は煌びやかに映え、盛り上がりが高潮を迎えた時、仕掛火花を以って宵宮が終了し、境内は静寂な闇に包まれた。



①.神幸乃儀

②.稚児行列

③.金神社

④.木遣り唄

⑤.手古舞

⑧.宵宮

⑦.榎森神社

⑥.三社合同祭典

御風輦

節分手筒煙火奉納

二月三日、今年で二十回目となった節分手筒煙火奉納祭が盛大に行われました。春を前に厄除け、無病息災、家内安全や商売繁盛などそれぞれの願いを込めて奉納され、仕掛け乱玉・大筒・中筒・小筒と計二六二本の手筒煙火が愛知県豊川市の煙火師によって打ち上げられました。

ここに奉納された皆様のご芳名を記載させていただきます。



第二十回節分手筒煙火奉納祭 平成二十四年二月三日

- | | | | |
|--------------------|--------------------|--------------|------------------|
| 1 伊奈波神社ことぶき会 | 7 松波隆生 | 49 杉山拓生 | 92 沼田静吾 |
| 2 尾関秀太郎 | 8 後藤直剛 | 50 各務和宏 | 93 沼田廣 |
| 3 國井敏明 | 9 四木会 | 51 長谷典雄 | 94 沼田真希 |
| 4 桑原善吉 | 10 三葉 | 52 三承工業(株) | 95 沼田成登 |
| 5 本郷代中矢三男 深見力 武藤豊弘 | 11 中日新聞岐阜支社 | 53 (有)同香堂本舗 | 96 栗山久 |
| 6 川島和男 | 12 津島建材(株) | 54 TAFE設計室 | 97 栗山幸 |
| 7 瀬古写真(株) | 13 京都鉄筋コンクリート工業(株) | 55 創建設計(株) | 98 岡本麻子 |
| 8 参集殿調理部 | 14 南谷寿雄・雅子 | 56 和歌山小椋幸博望会 | 99 岡本友尊 |
| 9 岐阜セラック製造所 | 15 御嶽本教・信和館 | 57 檜皮雅夫 | 100 岡本真美 |
| 10 大日コンサルタント(株) | 16 立正佼成会岐阜教会 | 58 檜皮久子 | 101 岡本玲奈 |
| 11 蔵珍窯 | 17 立正佼成会岐阜教会 | 59 中野知道 | 102 岡本知香 |
| 12 萩秋江 | 18 立正佼成会岐阜教会 | 60 中野千恵子 | 103 山口薫美 |
| 13 (株)エムケーゴルフ | 19 広瀬織布(株) | 61 林三代子 | 104 山口知葉 |
| 14 大松節子 | 20 酒徳昆布 | 62 笠松孔枝 | 105 沼田裕加子 |
| 15 スペースインドエネルギー | 21 たか田八祥 | 63 笠松ユミ | 106 長坂隆司 |
| 16 (株)飯沼造園 | 22 元坂酒造(株) | 64 笠松雅樹 | 107 堤正憲 |
| 17 (株)神路社 | 23 酒徳昆布 | 65 笠松歩高 | 108 岡田勝宏 |
| 18 京都奉製(株) | 24 (有)八百政 | 66 海瀬清光 | 109 岡田勝宏 |
| 19 (有)小島商店 | 25 中島印刷 | 67 海瀬清光 | 110 小椋千代 |
| 20 伊勢絵馬 | 26 ラパティスリーりぼん | 68 海瀬優 | 111 小椋妙寛 |
| 21 (株)西垣 | 27 亀甲屋本舗 | 69 海瀬史央 | 112 (株)伊藤紙器 |
| 22 奈良近畿戎協同組合 | 28 玉井屋本舗 | 70 海瀬歩咲 | 113 (有)御福餅本家 |
| 23 (有)三越 | 29 森実木材工業(有) | 71 山下敬一 | 114 伊勢一見 岩戸館 |
| 1 藤澤真一 | 30 (有)広瀬工務店 | 72 山下佐佐子 | 115 伊勢パールセンター |
| 2 西川長正 | 31 林義則 | 73 岡田佐右吉 | 116 茶道裏千家淡交会岐阜支部 |
| 3 高木幹雄 | 32 浅野辰夫 | 74 岡田静江 | 117 茶道裏千家淡交会岐阜支部 |
| 4 (株)大熊ゴム本店 | 33 (有)かわらや支店 | 75 岡田智子 | 118 阪本製菓所 |
| 5 琴栄楽器店 | 34 高橋俊樹 | 76 重松多寿一 | 119 職匠の家すぎ山 |
| | 35 (有)安藤商店 | 77 重松寿志 | 120 岐阜信用金庫 |
| | 36 (株)サン・アド | 78 上田敏子 | 121 笠原多見子 |
| | 37 内藤電機(株) | 79 辻山正己 | 122 久保正彦 |
| | 38 讃岐うどん高松屋 | 80 上野喜代子 | 123 久保正志 |
| | 39 東壽司 | 81 上野幸三 | 124 久保正和 |
| | 40 (有)誠和鉄工 | 82 上野耕作 | 125 (株)デザインボックス |
| | 41 グリーン産商(株) | 83 崎津文 | 126 笠原知寿子 |
| | 42 (株)とさわや | 84 岩崎洋文 | 127 岡井たか子 |
| | 43 美容室あららぎ | 85 岩崎和美 | 128 井奈波こと |
| | 44 都写真館 | 86 中尾政雄 | 129 服部郁子 |
| | 45 プロフォト岐阜 | 87 中尾美代子 | 130 遠藤造林 |
| | 46 二幸写真館 | 88 檜皮幸男 | 131 白ゆり敬神婦人会 |
| | 47 (株)大丸貸衣装店 | 89 山下正弘 | |
| | 48 (株)小林漆陶 | 90 沼田康 | |
| | | 91 沼田美知子 | |

順不同・敬称略

筒粥神事

一月十五日、今年の農作物・養蚕の吉凶占う神事が執り行われた。神門内に設置された斎場にて、沸騰した釜に米・小豆・竹筒を入れ、筒粥の状態で吉凶を占い、結果は花の撓祈年祭にて発表された。



筒粥神事

左義長神事

一月十七日、注連縄・門松など正月飾りなどを焚き上げ、今年一年間の無病息災を祈る左義長神事が行われた。焚き上げた火でお餅を焼き、そのお餅を食べると病気に罹らないと言われ、多くの参拝者の姿がみえた。



左義長神事

花の撓

二月二十日(旧暦一月晦日)午前十時、五穀豊穡・産業興隆を祈願する花乃撓大祭(祈年祭)が執り行われた。一月十五日に斎行された農作物を占う筒粥神事の結果を発表し、本殿前には、農作業に携した人形を展示した。



花の撓 (写真提供/吉田尚弘氏)

針祭り

二月八日、岐阜和服裁縫組合と日本和裁士会岐阜支部による針祭りが斎行された。衣食住は生活の基礎を成しますが、衣を設うに欠かせない縫い針を、大切に使用する内にもその役割を終えてしまった針を持ち寄って、感謝と裁縫技術の向上を願い針塚に納めました。

初鮎奉納

五月十二日午前九時、前日の鵜飼開きにて今年初めて捕れた鮎を宮内庁式部職・山下哲司鵜匠がご神前に奉納し、玉串を捧げ鵜飼の安全・豊漁を祈願した。

■鵜飼期間 五月十日～十月十五日

FC岐阜必勝祈願

一月二十九日、岐阜フットボールクラブの監督、コーチ、選手たちがご神前にて今年の必勝を祈願した。本殿にて祈願した後、神社特製の絵馬にそれぞれの目標を記し、決意を新たにしました。絵馬は、社頭に掲げております。



針祭り



玉串を捧げる山下鵜匠



FC岐阜必勝祈願

金光慥爾先生の神社祭式に寄せて

伊奈波神社宮司 東 道人

金光慥爾先生との出会いは、昭和四十二年（一九六七）八月、神宮皇學館神道教習科二年次の神社祭式、夏期集中講義の講師として、教壇に立たれた。先生が授業で祭式所作を

されると受講生たちが、両手を出して先生を支える仕草をして、声を発したものであるが、先生は何食わぬ顔で講義を続けられた。時に八十四歳であった。それが先生との出会いである。先生が伊奈波神社社司（現・宮司）を勤められていたことを、着任後まもなく知り得たことであった。そして、時は流れて、偶然に名古屋のある古書目録で「金光慥爾講述 神社祭式作法概説」のガリ刷全五七頁余りに亘る冊子を手に入したのである。奥付は「昭和六年九月・以謄写代筆記」とあり、続いて「岐阜市本町二丁目十一番地寓、金光慥爾（東京市外大森町谷戸二四五一）」と録されている。そこで、神社祭式のことを述べつつ、先生のことを少しく理

解を及ぼせたいと思うものである。なお、本年は先生の生誕一二九九年に当たることを付言しておきたい。

① 祭式

國學院大學神道学科の祭式教科書は、金光慥爾編述の青色本の『祭式』、黄色本のやや大きな『雑祭式』の二冊であった。いずれも小冊子であり、頁数も少なかつたこともあって、級友たちに訪ねたが所持しておらず、残念に思っている最中、茨城県・五所駒瀧神社宮司・櫻井崇氏が、先生の『祭式』があるとの報を受け、郵送してくれて見る事ができ、また岡山県・安仁神社宮司・三原千幸氏が、全く未知なる先生の『改訂増補・神社祭式服制調度教授要項』（日進堂書店出版部 昭和十一年七月一日改訂増補三版）を送ってくれたのであるが、まだ未見の著書が存在するかも知れない。管見の限り先生の著書は『新撰・祭式大成・調度装束篇』

（明文社・昭和十七年九月十日再版）と併せて、五冊があげられよう。ところで、神社祭式という名称は明治八年（一八七五）、式部寮編纂になる『神社祭式』が刊行されたのが最初である。その序文とも言うべき「上神社祭式表」に、次のように記述されている。

夫レ幣二宮國ノ別アリ。社二府縣郷村ノ等ヲ立ツ。幣帛ノ奠遷豆ノ享一定ノ式無ル可ラス。於是臣後改等。聖諭ヲ奉シ古ヲ稽ヘ。今ヲ酌ミ其虚飾ヲ去リ、其誠信二基キ祭祀ノ恒式ヲ擬撰ス。云々。

天子のおさとしをうけたまわれれば、古へをかながみ、今を酌み、そのうわべの飾りを去り、その誠信に基づくもをなぞらへることを述べている。つまり、祭式とは『広辞苑』（昭和三十九年十二月十四版）によれば、「神祇を祭る際の式の順序と行事作法」とある。つまり、神を祭るに当り式の作法や手順をねんごろに行なうことである。この『神社祭式』が版行され、その後、木野戸勝隆著の『祭式摘要』（明治十七年二月十三日・出版人平田胤雄）、次で『改正新神社祭

式 全』（皇学書院・大正三年十月十日三版）であるが、書名が示すように、上述の『神社祭式』を新たに改正した祭式綱要である。更らに皇典講究所（現・國學院大學）及び大阪國學院講師を兼任された宮崎四郎（徳島県板野郡出身）著になる『神社祭式行事作法要義 全』（同書院図書販売所・大正四年三月十日再版）が出版されたが、まもなく皇典講究所・國學院大學講師・大塚承一講述の『改訂増補 神社祭式行事作法要義』（帝國神祇学会 昭和十二年八月一日十三版）が発行され、前述の宮崎四郎の書名そのままに、改訂増補し、新たに「附録・雑祭式行事作法要義目次」などを附記したのである。引

続いて、大塚承一は『實修神社祭式行事作法精義』（京文社・昭和十二年七月二十八日刊）を執筆し、その序のなかで、
國學院大學に於ける学業を卒るや、更に進みて恩師青戸波江先生につきて軌道の研鑽に努むること多年、而して後皇典講究所國學院大學に職を奉ぜしものにして、爾後引続き其の職に住じ今日に及べるものなり。

と見え、大塚は宮崎四郎の後継者であり師弟と見做され、青戸波江に続く、祭式作法講師であったことが明らかとなる。次いで、青戸波江は『神社祭式行事作法教範 全』（明治書院 昭和十二年四月十日 六版）の序で、次のように述べている。それは、

明治八年神社祭式の制定せられしに拘はらず、各人各態殆ど一定の法式なきが如くになれりき。云々。

② 御造営

さて、金光先生は明治十六年（一八八三）四月二日、新潟県佐渡郡二宮村大字真光寺に孤々の声をあげられ、同四十五年（一九一三）三月、國學院大學神職養成部神職教習科を卒へ、大正二年（一九一三）五月、皇典講究所祭式講師となる。その後、昭和四年（一九二九）四月、伊奈波神社社司（現・宮司）となり、愛知國學院祭式科教員を兼任され、同神社御遷宮奉賛会理事長、同五年二月には岐阜県皇典講究外所階階検定常任委員、また社会教育委員などの要職を歴任され、昭和八年（一九三三）十一月五日、同神社を退き、翌九年四月、母校の國學院大學神道部並びに神職養成部講師に着任されたのである。とりわけ、御遷宮奉賛会理事長とあるように、明治二十四年（一八九一）十月二十八日、未曾有の濃飛大地震により、甚大な被害をもたらし、それ故に内務省並びに県、市の指導監督のもと御造営に着手し、本殿・幣殿・神門などは明治三十年（一八九七）十一月二十一日竣工を見たが、社司塩谷幸満のあとを受けた金光慥爾先生は、震災復興第一期工

事に次いで、拜殿・神饌所の新築工事に着手。昭和八年（一九三三）五月十三日、本殿遷座祭を挙行（『伊奈波神社略誌』昭和十六年九月二十三日刊）したのである。同先生は五年余り、伊奈波神社社司を勤め、御造営に渾身を尽したことが窺われる。ところで、祭式の変遷は前述の通り、明治八年（一八七五）の『神社祭式』から始まったのであるが、それらを詳述することは控へ、金光先生が著述した『神社祭式作法概説』から、「祝詞奏上の一」を引用して理解する一助としておきたい。

檀紙、奉書又は鳥の子等に謹みて階書いて正しく認め、凡そ勿の幅位に折たたむ。普通、大奉書を七折半に折りたたむため、要するに笏に添えたる時に持ちやすくする趣旨とす。その七折半を「半」を作るわけは、供進使が巻きたたむときに便利なればなり。

とあり、祝詞用紙は檀紙、奉書また鳥の子を用いるとある。『神社祭式』には「幣物・金貨ヲ入レ檀紙大奉書等ニテ上包ヲ折掛ニシ紅白ノ水引ヲ懸ヘシ」と見え、幣物とはへみてぐらゝ

の意味であるが、玉串料を包むのに用いられている。一般的には大奉書を祝詞用紙に用い、七折半に折りたたむのであるが、金光先生が「笏に添えたる時に持ちやすくすることが趣旨」とあるといい、その七折半の「半」は祝詞を巻きたたむ時、便利であることを説明されているが、その著『新撰祭式大成・調度装束篇』の「祝詞」のなかでも同様に述べているところである。

このように、金光慥爾先生が伊奈波神社の御造営を担い、今日の境内整備に尽力を傾注され、今日の國學院大學祭式の教授として、多くの神職を輩出された功績は、まことに顕著である。私も神職を志した時、元伊奈波神社社司と接したことを思い出しつつ、人のふれ合いと出会いがあつて、人は豊かなものとなるように思うのである。

祭式